「当然でしょ！？」
キ〇タマ責めは女の権利！
金責めに反対するドＳ団体リーダーの男を
ドＳ女子が地下闘技場に拉致って集団玉責め！

玉子王子　著

１章　「女は暴力で支配してやるべきだ」ドＳ男、末田の狂気の発想

とあるラブホテル。

若い男女がベッドの横に立っていた。

女はバスタオルを巻いた姿で、男はタオルを落として全裸。

――さあ、今日こそ童貞捨てるぞ！　女とやれば、少しは姉ちゃんたちとの関係もましになるかもしれないし……多少強気に出られるかも。あんまり強気になったら絶対やばいけど。

末田昇は、高校のとき始めて女と付き合った。

思えば、始めから大して末田は好かれていなかった。

男がいない状態にプライドを傷つけられるタイプの女で、前のと別れた空白時間にちょうど末田が告白したので付き合う事に決めただけだった。

それも、別の狙っていた男に脈があるとわかると露骨に態度を変えた。

それでも何とか末田はホテルまでこぎつけるが、童貞だと気付いた女は末田の一物を指差してあざ笑った。

「そんなにでっかくても、使ったことないチ〇ポなんて価値ないわよ！　前の彼氏は超短小だったけど、ヤリチンでセックス上手かったし！　それに比べたら、超デカチ〇でも童貞じゃね！」

別れるという女。

何とか説得しようとしたが、あざ笑うばかり。

フルチンで説得しようなどという時点で上手く行くわけがないが。

姉二人に妹二人という女に囲まれた生活。姉たちは先に生まれたからには当然体も大きく、そのくせ「女は弱いんだから」といって遠慮もなく急所を狙ってくる。

姉たち同様、妹らには年上風を吹かせていたが、中学の少し前、ある日部活から帰ると、姉妹四人が酷く楽しげにしていた。

特に**姉が嬉しそうだと嫌なことが起こる前触れ**という気がして不安だったが、それは見事に的中した。

妹らがせがむので「戦いごっこ」をしたところ、二人は当然のように兄の股間にゴチャッと音が鳴るほど、女特有の遠慮のなさで爪先を減り込ませてきた。

妹との力関係が逆転した瞬間だった。

元々威張っていたわけではないし、それから妹らが威張りだしたわけでもない。

しかし喧嘩になったら急所攻撃でやられるということが明らかになってしまった以上、今までの関係ではいられない。

末田と何かあると、姉たちが「股間を押さえて痛がる」ようなしぐさをしてみせる理由を知った妹たちは、同じように末田に対してくるようになった。「金ちゃんやっちゃうよ、いいの？」という無言の脅しによる**譲歩の強要**である。

女四人に男一人では、いずれ押しきられるのは目に見えていたとはいえる。だからその日の「戦いごっこ」は切っ掛けでしかない。

だがその日の、妹らに蹴られた急所の痛みは長く末田の心の中に残った。

女には逆らえなかった。

小柄で気の弱い同級生でさえも、遙かに小さい妹の金蹴りで何度となくノックアウトされている末田には内心恐怖の対象だった。

女には勝てない、と思っていた。

だから、その初めて付き合った女とホテルに行ったときも、酷い態度を取られても怒れなかった。

というか、元々「女に強く出られない男」と舐められていた。

が、弾みで平手打ちをしてしまう。

平手打ちは、末田にとっては身近な攻撃だった。

よく姉がビンタの嵐を食らわしてくれた。

一人が羽交い絞め、一人が睾丸を握りつつ空いた手で平手打ちというのが「男殺し」と双子の姉二人が呼ぶ必勝形。

体格で劣っていた昔から、単なる力なら二人合わせても押しきれるようになってからも成すすべがなかった。

「男は女に勝てないのよ、キ〇タマぶら下げてるからね！　わかった昇？」

「ん？　わからない？　じゃあ**金ちゃん潰して妹になる**？　タマタマぐらい薬で治るんだから、しばらく**玉無し状態楽しんでみる**？」

ギュウギュウと鍛えようがない部分を握り、心底楽しそうな姉たちの姿が、女を平手打ちしたときに頭に浮かんだ。

女＝**睾丸への一方的で容赦なき暴力**。

ギュウウ、と一瞬でこちらも丸出しの巨大な睾丸が縮み上がる。

――や、ヤバイ！　キ〇タマやられる！

震えて、膝を締める。腰を引いて、**股の出っ張り**を太股に挟み込む。

姉相手には、余り意味がない。

「防いでんじゃねー！」

などといいながら、フックでボスボスと股間を殴りまくられるのだ。衝撃は防ぎきれない。

膝を締めた状態では逃げられないので、もう一人が当然のようにビンタを食らわしてくるのはいうまでもない。

防ごうと体をよじっていると足の間に隙が出来、ついにはズボッと手を突っ込まれて金握りをかまされる。

「金ちゃんゲット！」

「防御した罰に、握り潰してあげようよ！」

姉たちのいうことは一々ヤバかった。妹らもある程度年齢が上がってくると似たようなことをやりだして、ますます勝ち目がゼロになった。まあ元からゼロなのだが。

目の前にいるのは、姉や妹と同じ。

睾丸という絶対急所を持たない無敵の存在だ。

自分が持たないので、反撃を恐れず一方的に狙い撃ちにしてくるのだ。

急所狙いの烈火の反撃が始まる。よりによって女に攻撃などしてしまったのだから。

罵声に縮んでいた一物がさらに縮む。

が、女は動かなかった。

動かず、叫ぶ。

「ご、ごめんなさい！　許して！」

想像を絶する言葉だった。

ボロボロ泣き出す女。

「で、でも、もうエッチとかは……そんな気分じゃ……」

思わず、もう一発平手打ちにした。

「いやっ！　殴らないで！　わかったから、何でもするからっ！」

僅か二発の平手打ちで、あっさり降参。

末田は信じがたかった。初セックスの途中でも、いつ相手が「嘘でした！」といって**急所を握り潰しにくる**のかと気が気ではなかった――それでもフル勃起出来るのだから若いといえる。

が、最後まで何の反撃もなかった。

女に勝てた。

勝てたというか、女など暴力で従わせるものなのだと気付いた。

思えば、姉にも妹にも本気で反撃した事などない。

姉は始めから勝てるとは思えないほど強大だったし、小さな妹たちを叩くなど論外だ。

――そうか、今までのことは……俺が反撃しないから、起こってただけだ。

確信した。

女に勝つことはできる。急所があろうと、そこをやられる前に殴り倒してしまえばいいのだ。

初セックスは五回も出して終わった。

が、別に気持ちいいとか、そういう感動はなかった。

家に帰り、押入れの中で考えを纏めた。

――誠意を持って話しても相手にしない女が、暴力一つでいうことを聞いた。こっちはキ〇タマ丸出しだったのに、指一本触れられず……そうだ、女には勝てるし、暴力でいうことを聞かせるべきだ。何が正しいかなんて、女にはわからないんだ、支配してやるべきなんだ。

確信した。

頬が弛む。

と、襖が開く。

「お兄ちゃんお帰り！」

「プロレスごっこしよう！」

妹も双子。

まだ中学にならないが、二人合わせると結構な力があって引きずり出される。

「ちょ、ちょっと待て……今日は……ああっ！」

「はいはい、着替えようね」

「お兄ちゃんの服は、キ〇タマを潰されたい人には見えない服ね！」

「見えるでしょ？　うひひひ。見えないなんて嬉しいこといってくれたら、望通りにしてあげるよ！」

フルチンにされ、「プロレスごっこ」強要。

畳の部屋の真ん中に引き出され、全裸の末田。

前に二人で立つ妹たちは下手をすれば半分の背丈である。スパッツにシャツというラフな恰好。

それが、唾を飛ばして笑う。兄の股間を指差しながら。

「ぎゃははは！　チンチ〇ブラブラしてる！」

「相変わらずデッカイねえお兄ちゃんのチンチ〇！　そらっ！」

「はうっ！　に、握らないで……あああああ！」

「ぐいーんっと！」

「引っ張ったらもっと大きくなっちゃうね！」

というか、末田が並外れた巨根なのは姉や妹にこうして引っ張られまくった成果かもしれない。

ともかく、妹の一人が引っ張る。引っ張られればそっちに行くしかない。

大股開きでドスドスと畳の上を歩く。ブラブラと巨大な急所球が揺れるのをもう一人の妹が手を叩いて笑う。

「ぎゃはははははは！　き、き、キ〇タマが！」

「や、やめ……だめだって、こういうのは！」

「なんで！　お姉ちゃんたちもやってるじゃん！」

「そういうえこひいきするキ〇タマは……」

　兄の顔を見ながら、何かを持ち上げるしぐさをして手をニギニギとしてみせる妹。

「き、キ〇タマ関係ない……ほぐっ！」

　伸ばされる手を避けようとするが、一物を握って逃げられないように引っ張られているのであっさり金握りの形になる。

　小さな手で巨大な玉を握ろうとするので、すでにそれだけで握り潰しに掛かっている形だ。

「ほおおおおお！」

「ほおおおお、だって！」

「やっぱりタマタマ狙ったら男なんてイチコロだよね！」

「っていうかお兄ちゃんまだ痛くないでしょ！　痛いっていうのは、こういう状態だよ！」

「ぎょおおおおおおおおおおおおおお！」

　ギュウウウウウウウウウウウウウウウ。

　さほどの握力ではないが、睾丸に加えられるなら処刑級の圧力を生む。

　――ひ、ひでえ、なんでこの流れでキ〇タマ握り潰しになるんだ？　やっぱり女なんてクソだ。で、でも……こいつらを殴り倒そうと思えば倒せる。やらないだけだ。女にはやっぱり勝てる。

「ただいま！」

「あ、面白いことしてるじゃん！　キ〇タマ処刑ごっこ？」

　まったく違うが、仮にそうだとしてもやることは変わりそうにない。

　末田の五歳上で――というか姉も妹も全員「末田」だが――去年成人した姉たち。今大学に通っている。

　そろそろ弟への態度も変わってきて良さそうな気がするが、相変わらず寝ていたら布団にもぐりこんでいて睾丸にデコピン、風呂に入っていたら一緒に入ろうと押しかけてきて洗ってやるといって金握り、これといったきっかけもなく「プロレスやろうぜ」などといって一方的なM格闘を強要という無茶苦茶な二人だ。

「プロレスごっこだよ！」

「じゃあ私らともプロレスやろうぜ！」

「っていうかフルチンじゃん！」

「妹にデカイチ〇ポ見せたいんだ？　この巨根が！」

「あうっ！」

　パン、と平手打ち。

　この躊躇のない行動に慣れているので、末田も今日女を殴れたのだ。

　――そうだ、俺は変わった……もう姉ちゃんたちより俺の方が力あるはずだ。前からそうだった。だから振り払おうと思えば振り払えるんだ。これはやらせてやってるだけ。

「おおおおおおおお！」

「何よそ見してんのよ！」

　ギュウウウウウウウウ、といつの間にか妹と交代して金握りしていた姉の一人が睾丸を握り潰す。

　弟の一番大事な所だなどという遠慮は欠片もない。

　小さな妹の力とは比べ物にならない。

　顔が強張る末田。

「あああああああ、キンタ、キンタ……キ〇タマあああああああ」

――潰れる！　今潰れる！　やめてくれ、今放せば間に合うからやめてくれっ！

爪先立ちで声も出ない弟に体を密着させる姉。

「そらそらキ〇タマ潰れろ。うふふ、まだまだ全然本気出してないよ？　お姉ちゃんの本気のキ〇タマ握り潰し久しぶりに食らってみる？」

「っていうか久しぶりに片金ずつ潰しちゃおうか」

「いいねえ！」

「わー、お兄ちゃんの去勢声聞ける！」

「やったぜ！」

「ひいいいい！」

震える。

それでも、女を殴り、半ば無理矢理初セックスした衝撃は消えなかった。

この後、末田は徐々にドＳとして覚醒し、「女は暴力で支配してやるべき」という思想を強めていく。

そしてついには日本で三本の指に入るドＳ男の団体「**穴支配団**」の団長にまで上り詰めるのだった。

「お、チ〇ポ立ってきた！」

「大きいわあ！　彼氏の二倍よ！」

「見栄張るんじゃないわよ！　私の彼氏なんてチ〇ポ**乾電池**よ？」

「わー！　クラスの男子より小さいよ！」

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

後に、末田団長はこの日の前半のビンタからの初セックスシーンはよく思い出すが、姉たちとの後半は自伝などでもなかった事にするのだった。

「あ、片金潰れた」

「あああああああああああああああああああああ！」

「大丈夫大丈夫、ナノテクで玉再生だから！　十秒でポンよ！」

「じゃけん私にも玉潰しさせなさいねー」

睾丸を潰されて倒れ、泡を吹く弟をまるで心配しない姉たち。

「ひ、ひぎいいい」

「お兄ちゃん大丈夫？」

「タマタマ痛い痛いねー」

股間を押さえ、口先だけ心配そうな妹たち。顔は明らかに笑っていた。

無茶苦茶な四人だが、皆末田のことが好きであることは間違いない。

ただ、このうさぎ県に多いドＳであるというだけだ。

――ま、間違ってる……簡単に治るからって、簡単にキ〇タマ潰すなんて間違ってる……やっぱり女は何が正しいかわからない、支配してやらないと……

考えつつ、必要以上にダメージがあるように見せて次の攻撃を遅らそうという消極的な戦法に出る末田。

だが、当然姉はもちろん妹にも通じない。

というか、別に四人は末田が見せる「ダメージ」が誇張されていると見抜いたわけではない。

　別にそのぐらいダメージを受けていても構わないと思っているだけだ。

「さあ残ったタ〇キン差出な、お姉ちゃんに差し出しな」

「そしてお姉ちゃんになってよ！」

「そうそう、久しぶりに妹になれよ昇」

「仲良し五人姉妹ね！」

「ぎゃはははは！」

「ひいいいいい」

　――い、嫌だ、治るからって玉潰しなんて嫌だ……

　すでに片金潰されている金袋を押さえ込みながら、張って逃げようとする末田。しかし片金をやられた激痛の中、逃げ出せるほど女たちは甘くなかった。

体験版終わり

姉妹に金ちゃんをあっさり潰される末田。

治るからいいだろうと姉妹たちは本気で思っており、これが彼の日常なのだった。

この後、一気に物語は二十年後に。

ドＳ男子と化し、政治家となった末田は、ついにキ〇タマ責めの厳罰化を目指して動き出すが、

察知したドＳ女子たちに拉致られてキ〇タマ潰しを食らい、夢破れることとなる。

続きは製品版でお楽しみください